小樽商科大学百年史

中村善策　画 「緑丘回想」 小樽商科大学 蔵

小樽高等商業学校　スケッチ（1930年代）

小樽商科大学　本館

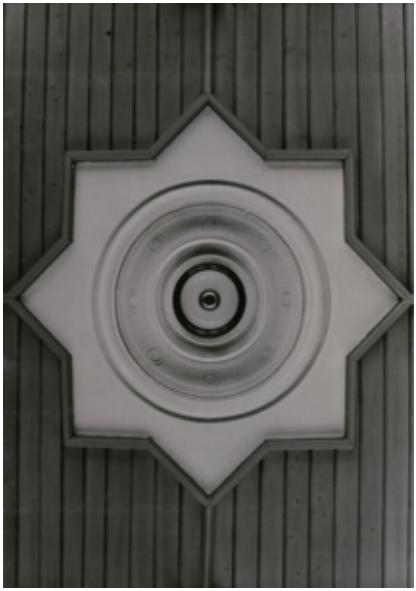
商品陳列館・図書館

雪の高商　大講堂

商大全景（1972年頃）

「正面階段手摺」

「正面階段二階と螺旋階段」(解体直前)



「講堂天井照明器具」

歴代校長・学長

渡辺　龍聖

伴　房次郎

苫米地　英俊

大野　純一

加茂　儀一

実方　正雄

伊藤　森右衛門

長谷部　亮一

藤井　栄一

山田　家正

秋山　義昭

山本　眞樹夫

大西　猪之介

手塚　寿郎

商業実践室

図書館閲覧室

タイプライター教室

校庭で憩う学生たち

校庭で憩う教師たち

寮（窓から顔を出して）

校庭でのストーム

映画館で（1947年）

囲碁に興じる（智明寮屋上）

大学立法反対デモ（1969年）

螺旋階段付近で

序　文

国立大学法人小樽商科大学長　山　本　眞樹夫

明治四三（一九一〇）年勅令第六六号をもって小樽高等商業学校がわが国で五番目の官立高等商業学校として設置され、翌明治四四（一九一一）年五月五日、七二名の第一期生を迎え入れて本学が開学しました。その後、小樽経済専門学校そして小樽商科大学と名称こそ変われ、この緑丘の地に百年の歴史と伝統を築いてきました。五十年前、当時の加茂儀一学長は次のように述べています。

「ことに本学にとって最大の幸運は、戦後本学がその伝統の強さによって他の多くの学校の如く合併されるという運命から免れることができたことであった。名称こそ変遷があったとはいえ、本学そのものの内容は少しも変わらず……」（加茂儀一「序文」『緑丘五十年史』、昭和三六年。）

さらに五十年を経た今、加茂学長の思いは、なお一層強く感じられます。小樽高商の開学を起点とし、小樽高商、小樽経専そして小樽商大の同窓が一体となって歴史と伝統を引き継ぎ、今年創立百周年を共に祝うことができることを、われわれは大いに誇るべきです。

開学時すでに校舎は完成していましたが、教授、生徒が起居する家もなく校長始め教授の多くは直行寺という寺に合宿し、生徒は雨天体操場を仮寄宿舎として梁山泊のごとき状況から本学の歴史が始まったといいます。初代校長渡邊龍聖は「実学、語学及び品格」の育成を教育のモットーに掲げ、小樽高商の伝統の基礎を築きました。現在では、商学部のみの単科とはいえ、学士、修士、博士そして専門職学位（M.B.A.）の全ての種類の学位を授与できる、わが国の商学教育、研究の拠点大学として発展してきていますが、「実学、語学及び品格」の育成という教育のモットーはいささかも変わることなく、むしろ本学の次の百年の方向を示す明確な指針となっています。

また、本学の品格教育の中核ともいうべき学生寮の伝統も、昭和五九（一九八四）年智明寮の廃寮とともに、この四半世紀以上ものあいだ途絶えていましたが、創立百周年最大の記念事業として、同窓会である緑丘会から資金の手当てを含めた熱烈な御支援を頂き、新生の輝光寮として蘇りました。寮生諸君が旧寮の伝統を引き継ぎ、そして新たな伝統を築いてくれるでしょう。

さて、この『小樽商科大学百年史』は、記念事業の一環として百周年記念事業委員会のもとにある百年史編纂室によってまとめられたものです。本学の正史としては、創立五十周年を機にまとめられた『緑丘五十年史』がありますが。この百年史は、五十年史以降の本学の歴史だけでなく、創立以来百年の歴史を現在の地点から改めて見直し、考察しようとするものです。

創立五十周年以降、本学では様々な拡充改組やカリキュラム改革が行われ、また戦後の学制改革以来最大の改革といわれる国立大学の法人化という、本学にとってもきわめて大きな出来事がありました。これらの改革、あるいは変革を経た今、改めて本学百年の歴史を振り返ることは、われわれ教職員に限らず、同窓、学生、教育関係者にとって大きな意義を持ちます。また、広く日本史研究、世界史研究への学術的貢献も大きいと思います。

歴史とは、たんに過去の出来事の記録ではなく、未来への展望の窓口でもあります。私自身、学生部長等の管理的業務に就いて以来、迷いがあるときには、まず『緑丘五十年史』を紐解き、考えをまとめました。この百年史は、姉妹編である写真集とともに、さらに頼りになる大学運営の参謀役となるでしょう。また、本学関係者の全てにとって、本学の次の百年を構想する重要な指針となるはずです。

おりしも今年は、東日本大震災、それにともなう原子力発電所の事故と、わが国は未曾有の困難に直面することとなりました。世界史的にみても類を見ない被害の大きさを考えると、日本という国の在り方も変わらざるをえないと思われます。幸い被災を免れた本学も、例外ではありません。歴史の流れは、今、大きな不連続の特異点にあるのかもしれません。日本という国の在り方、人々の価値観の変化は、本学の次の百年に大きな影響を与えるでしょう。しかし、このような時にこそ、歴史は多くのことを教えてくれます。まさに本書の刊行は機を得たものといえます。

本書は、百年史編纂室によって編集されましたが、通史は荻野富士夫教授の執筆によるものです。荻野教授の史学に関する高い学識と、本学への深い愛情が、本書の完成へと導きました。荻野教授に深く感謝します。また、個別史を執筆して頂いた先生方、執筆を支援して頂いた百年史編纂室、附属図書館のスタッフ、そして長年にわたり百年史編纂室に経済的援助をして頂いた緑丘会に篤く御礼を申し上げます。

大震災の被災者に深い哀悼の意を示すとともに、本学に伝わる言葉「北に一星あり、小なれどその輝光強し。」のごとく、百周年を経た本学の存在が、日本の復興にとって、北に輝く希望の星であることを願って。

平成二三年五月五日

祝　辞

社団法人緑丘会　公益財団法人小樽商科大学後援会　理事長　齊　藤　愼　二

創立百周年に際し、社団法人緑丘会、公益財団法人小樽商科大学後援会を代表し、お祝いの言葉を述べたいと思います。

我々の母校である小樽商科大学は、幾多の厳しい時期もありましたが、緑丘に集う人々の叡智により、その困難を克服し、一貫して建学の精神を尊び、素晴らしい成果を実現し、伝統を輝かしいものとしてまいりました。

そして、今、百周年を迎えることは私たち同窓生にとっても大いなる喜びとするところであります。

また、緑丘が、社会から高い評価を得ていることは、学生、教職員そして同窓生の弛まぬ研鑽の結果であること

に深い感銘を覚えると共に、百年の歴史の重さをも痛感いたします。

我々同窓生は、母校とは断ち難い縁があり、まさに、終生、母校と一体であります。

我々同窓生は、尚一層、研鑽を積み、社会で活躍することにより、緑丘の評価をさらに高めていきたいと考えます。

一方、母校の学生が社会から期待されているのは、多くはビジネスの世界であります。

これから母校がさらに発展するためには、社会に有為な人材を養成し、加えて、ビジネスの世界における尊敬されるリーダーをいかに多く輩出するかにかかっています。

これからの社会はどのような方向へ向かうのか？　あるべき社会はどのような社会なのか？

まさに、これから問われようとしているのは、母校のこれからの百年であります。

そのようなことを考えた時に、私たちは時代を切り開いていく開拓者として、建学の精神に思いを致し、その意図するところをより高めることが肝要と思います。

よく言われている言葉に、皆さんご存知の、「実学、語学及び品格」また、「北に一星あり、小なれどその輝光強し」があります。

その言葉の意味するところへ向けて、もっと力強く、舵を切り、改革のスピードを上げなくてはなりません。

現在、小樽商大の大学としての組織、即ち、四学科体制の学部、そして大学院の博士課程とビジネススクールなどは整備されてきました。

今、その組織の中に、もっと熱い魂をしっかりと込めていくことが期待されます。

財団法人小樽商科大学後援会は、公益性の観点に立ち、母校を支援してきた長い活動の歴史があります。その活動は高く評価され、記念すべき百周年の年に、公益財団法人へ移行いたしました。

社団法人緑丘会は、同窓生の交流の輪を深めると共に、母校の発展に協力することにより、さらに公益性を強化し、社会へ貢献してまいります。

これからの百年に向けて母校がさらなる発展をし、社会から高い評価を得ることを心から祈念し、「心のふるさと緑丘よ永遠なれ」という思いを込め、お祝いの言葉と致します。

二〇一一年六月

小樽商科大学百年史　通史編　目次

口絵
序文……国立大学法人小樽商科大学長　山本眞樹夫
祝辞……社団法人緑丘会　公益財団法人小樽商科大学後援会　理事長　齊藤愼二

通史編

第一編　小樽高等商業学校の軌跡

第一章　創立前史

第一節　高等商業教育気運の高まり……4
高等教育需要の増大 4　実業専門学校の拡充 5　「商業教育の時代」7
山口高等商業学校への転換 9　長崎高等商業学校の創設 10

第二節　「第五高等商業学校」の決定……12
「建設の小樽は創造の小樽」12　「高等商業学校要望の第一声」14　小樽誘致へ 16
創設の内定 18　校地の選定 20　創設費の工面 22　「商業道徳の向上進歩」への期待 24

第三節　開校までの準備……26
地均し 26　校舎建築 27　開校の遅れと繰上げ 30　小樽高等商業学校の設置 31　初代校長渡辺龍聖 32
欧米高等商業教育の視察 34　学科目の制定 36　教職員の選任 38　入学試験 39

第二章　緑丘の創立――渡辺龍聖校長期

第一節　開校……44

第一回入学生 44　授業料など 45　校内の事務分掌 48　「生徒気質」 49
「マアキユリ山」・地獄坂 52　「新しき気分」 54　ある停学事件 56

第二節　教育体制の始動 …… 59
「少年紳士を以て遇する」 59　「実際に通じる人」の養成 60　「教授要目」 62　「商品実験」 67　「商業実践」 70
「臨時講演」 73　選科生 74　「実践調査報告」から卒業論文へ 75　授業風景 78　試験 83　入試状況 85
「落伍」者 87　「企業実践」 88　図書館 92　商品陳列館 94　修学旅行 94　就職・進学 96　卒業式 101

第三節　教員陣の充実へ …… 104
「北辺の高商へ」 104　大西猪之介の任用 105　「首席採用主義」 108　実践的人材の登用 111
他校からの割愛 114　伴房次郎の招聘 116　最初の外国人教師 119　外国人教師フートの採用 120
商品実験のフランク 122　「掛軸、置物」批判 125　ネフスキーの赴任 127　年末賞与の増俸 128
重い授業負担 131　転出者の増加 132　『小樽新聞』への寄稿 133

第四節　学生生活の始動 …… 137
寄宿舎の生活 137　ストームと「研究以外面会謝絶」 140　校友会の結成 142　運動部の始動 145
外国語部大会 149　弁論部大会 151　緑丘吟社 154　小樽の三年間 156　南亮三郎筆禍事件 160

第五節　第一次大学昇格運動 …… 161
高等教育機関の拡張へ 161　「脅かされつゝある緑ヶ岡の学園」 162　大学昇格運動の惹起 164　渡辺校長の対応 166
「本校を専門学校らしくあらしめたし」 169　「専攻科」設置案 170　「小樽高等商業学校昇格期成会」の発足 172
「内容ノ充実」へ 174　創立一〇周年記念式典 176　渡辺校長の退任 177　名古屋高商校長として 179

第三章　緑丘の充実――伴房次郎校長期

第一節　緑丘のルネサンス …… 184
「北に一星あり」 184　「守成耕耘の重責」 185　「学園の慈父」 187　「自由教育」の実相 189
「学園の分解」を越えて 191　緑丘のルネサンス 193　「緑丘の沈滞」 194

第二節　教育体制の展開……197
最初のカリキュラム改革 197　二学期制の採用 201　試験の諸相 203　二度目のカリキュラム改革 205
選択科目・時数の多さ 208　修業年限延長問題 212　手塚寿郎の講義 214　「商業擬営実践」 217
ノート制度批判 219　ゼミナール 221　卒業論文の多様化 225　「軍事教練」の開始 229
事件以後の「軍事教練」231　図書館の閲覧状況 234　入試の緩和から激化へ 236　入学者の変化 240
長びく就職難 243　就職戦線の好転 248　官立商科大学への進学 250　山上グランドの竣工 252　校舎の新増築 254
シャンツェの設置 257　第一四臨時教員養成所の設置 259　臨教の授業 260　研究科設置の動き 264
第三節　研究体制の展開……266
研究活動の推移 266　教員人事の諸相 268　大西猪之介の死 271　『大西猪之介経済学全集』の刊行 273
『商学討究』の創刊 277　北海道経済研究所の設置 282　『土功組合の研究』など 284
日本経営学会小樽大会の開催 287　『マルサス研究』290
第四節　学生生活の展開……293
悪太郎「高商生活　思出の記」293　学生生計調査 296　『校友会々誌』から新聞『緑丘』へ 299
『緑丘』論調の変化 302　校友会改革の試み 305　選手制度批判 307　応援団長の公選 311
共済部 313　校歌の選定 317　修学旅行の変容 320　運動部の活躍 322　文化部の活躍 327
道外の巡回講演へ 330　外国語劇の盛況 332　『松本栄司遺稿集』から 337　夭折 339
第五節　変動する社会のなかで……342
社会科学研究会の創設 342　学連大会出席問題 344　軍教事件の惹起 346　想定への抗議 348
社研の抗議運動と「穏健派」学生 353　高商当局の抑圧措置 357　軍教事件の収束 361
『北方文芸』創刊 363　プロレタリア文学傾斜と廃刊 365　その後の文芸研究会 368
小林多喜二の記憶 369　思想取締 372　思想善導 375　「満州事変」の余波 378
第六節　小樽のなかで……385
函館大火募金と凶作地救援運動 385　「成人教育講座」387　各種講習会 391

第四章　戦時体制のなかの緑丘 ―― 苫米地英俊校長期

第一節　苫米地体制の確立 …… 394

小樽高商赴任まで 394　小樽への赴任 395　「商業英語」の確立 396　国際事情への発言 399
「カミソリ」校長の登場 400　教導部の設置 402　校内機構の一新 404　研究基金の募集 405
「学理」と「応用」の統一 409　創立二五周年記念 412　行幸 416　緑丘会の創立 419
「研究科への暁光」 422　経常費 425

第二節　教育体制の転回 …… 427

『教授要目』の概要 427　『商業実践必携』 435　教室の風景 438　スペイン語新設 440
「語学乙類」の新設 442　過重な授業負担 447　繰上げ卒業 448　入試の激化 452　就職「黄金時代」 456

第三節　研究体制の戦時化 …… 461

一九四〇年の研究状況 461　戦争への傾斜と協力 463　『国家と経済』・『戦争と経済』 466
戦争から離れて 472　応召と転出 474　外国人教師たち 478　経済研究所への拡充 481

第四節　学生生活の戦時化 …… 485

学生論の活況 485　食糧事情の悪化 488　体力・体位の向上 492　学生生活の統制へ 496
報国団・報国隊 499　迫る戦争の影 503　勤労動員 507　閲覧禁止図書 510

第五節　アジア太平洋戦争と緑丘 …… 513

一二月八日の情景 513　マッキンノンの検挙 515　「標準教授要綱」に準じて 517　戦時下の授業風景 521
手塚寿郎の離学と死 525　学校教練の強化 530　「専門学校教育の刷新充実」案 532　臨時徴兵検査 535
学徒出陣 537　入試志願者の減少 542　繰上げ卒業下の就職 546　第五寮（清明寮）の設置 550
「聖戦下の敢闘譜」 555　経済専門学校への転換 558　経専における授業 561　「皇国経済学」 566
北方経済研究所の発足 571　苫米地校長の苦悩 574　集団勤労動員・援農 576　緑丘の戦没者 581
スミルニッキーの受難 585　フランクの悲劇 587　八月一五日の情景 589

第五章　緑丘の再建――大野純一校長期

第一節　民主化の模索 …… 594
最後の繰上げ卒業 594　専修科設置 599　占領軍の接収 601　「学園民主化具体案」の決議 602
『緑丘』の復刊と配布停止 607　男女共学 613　苦米地校長の辞職、政界へ 616
大野純一の校長就任 619　事務体制 623

第二節　教育体制の民主化 …… 625
カリキュラムの改編 625　勉学意欲の高まり 629　答辞 632　授業の諸相 634　教員陣の補強 639
戦後の入試状況 643　戦後の就職・進学状況 645　課外講義・文化講座 648

第三節　研究体制の民主化 …… 651
研究再開まで 651　「学問の緑丘の再建」へ 653　経済研究所の復活 654　『社会経済研究』の創刊 658
南亮三郎の教職不適格 661　高橋次郎の教職不適格 665　科学研究費の採択 667
日本経営学会臨時大会の開催 668　講師の依頼 670

第四節　学生生活の再建 …… 671
食糧難のなかで 671　学友会の結成と改革 673　ボート部の全国制覇 676　文化部の活動 679
共済組合の発足 682　「渋顔の図書館」 684　寮の再生 686　「灰色の丘」 690　授業料値上問題 692

第五節　大学昇格への苦難 …… 695
「全国第三の官立商科大学」へ 695　小樽経済専門学校昇格 小樽商科大学設置 期成会の結成 697
新制商大への単独昇格へ 700　「小樽商科大学設置申請書」 706　「北海道新制大学設置期成会」 710
GHQとの関わり 711　「小樽経済大学」 718　募金活動 719　「一般教養科目」の導入 721
学生の転換方式 724　大野純一の学長就任 725

第二編　小樽商科大学の軌跡

第六章　新制商大の出発

第一節　「日本一の単科大学たらんことを期す」……732

開学式 732　新制商大の概要 734　拡充資金の募集 739　経済研究所の官制化構想 741
二学部構想 742　短期大学部の設置 744　小樽経専の閉校 748

第二節　新制大学の教育と研究……750

入試 750　一六四単位 752　丘の声 757　集中講義 760　短大の教育 765　図書館 768　完全就職 770
『開学記念論文集』774　『商学討究』復刊と『人文研究』創刊 776　著作の刊行 778　教員の社会的発信 780

第三節　窮迫する学生生活……784

厚生施設の貧困 784　「寮をのぞく」787　大学祭 789　学生委員会 792
学生の社会的関心 795　北大との定期戦 798　五楽園 801

第七章　商大の基礎確立へ

第一節　沈滞の危機……804

「思索研究の理想境」の明暗 804　大野学長再選をめぐって 805　商業教員養成課程・専攻科の設置 809
学生部の設置 812　教職員組合の結成 814　現職警察官聴講問題 815　学長選の経緯 818
「古瀬・麻田プラン」820　短期大学部の曲折 823

第二節　「沈滞から建設へ」……826

加茂儀一の技術史・文化史 826　新学長の招聘 829　木村私案「商学一本にせよ」833　緑丘会寄贈講座 835
五〇周年記念募金 837　管理科学科の設置へ 840　ランゲージ・ラボラトリーの開設 845
学生会館と智明寮の建設 846　加茂行政の評価 848　「大学の理念」を求めて 852

第三節　教育・研究体制の確立 …… 854
難関の入試 854　「沖縄留学生」 856　カリキュラムの改革 858　授業の諸相 863　「マルクス経済学」開設の要望 867
ゼミと卒論 870　「完全就職」の継続 875　研究題目 879　「北海道産業連関表」の作成 883
第四節　疾風怒濤の学生生活 …… 886
自治委員会の結成と活動 886　智明寮の誕生 889　商大生の実像 892　続・小林多喜二の記憶 894

第八章　拡充期の商大

第一節　高度経済成長期の量的拡大 …… 900
商大の量的拡大 900　実方正雄の学長就任 902　“SANEKATA THE SINCERE” 905
「二学部六学科」構想 907　旧本館の取りこわし 911　大学院の設置 913　一九七二年のカリキュラム改正 915
七〇年前後の授業の様相 920　短期大学部の変動時代 926
第二節　学生の社会的変容 …… 928
生協の創設 928　「商大闘争」への前走 931　事務棟封鎖から全学ストライキへ 933
教室封鎖の思想性と解除の論理 937　一般学生の動き 941　封鎖解除 945　一三項目要求 947
収束へ 951　七〇年代の学生運動 953　「時代に浮遊する商大生」 956　パタゴニア遠征 958
第三節　四学科・夜間主コース体制の確立 …… 960
「三学部五学科」構想 960　経営法学コースの設置 965　長谷部学長から藤井学長へ 967
「三学部五学科」構想の転換へ 971　四学科体制へ 974　「夜間主コース」の設置 981
「言語センター」の設置 985　「地域経済研究資料センター」の構想 988　「国際化」の志向 990
エバーグリーン講座 992　入試改革 995　移転問題 998

第九章　「商科系単科大学」としての発展へ
第一節　大学改革の嵐のなかで……1004
大学理念の転換 1004　加速する大学改革 1008　一般教育改革 1010　一九九七年度新カリキュラム 1017
教育課程の改善へ 1023　二〇〇一年度カリキュラム改革 1026　「商科系単科大学」としての将来構想 1031
ビジネス創造センターの設置 1036　大学院改革へ 1042　アントレプレナーシップ専攻の設置 1046
国際交流の本格化 1051　自己点検・評価への取組み 1057　意思決定機構の整備 1060　事務機構の再編整備 1063
独立法人化への疑念 1065　法人化移行の準備へ 1069　再編・統合問題をめぐって 1072
第二節　現代の商大生……1075
生活実態調査から 1075　札通生と女子学生の増大 1078　「商大のいいとこ、わるいとこ」 1081　学生たちの活躍 1083
第三節　国立大学法人としての出発……1086
中期目標・中期計画 1086　法人化のもたらしたもの 1089　「本学の進むべき道」 1093
あとがき……1096
小樽商科大学百年史年表……1100
編纂委員会名簿……1116
索引　人名　事項……1139

『学科史・統計資料編』

［学科史・個別論文］

日本経済学史における小樽「高商アカデミズム」— gründlich な研究へのあくなき志向— …… 上久保敏
小樽商大商学史 — 人と業績— …… 片桐誠士
小樽商大経営学史 …… 篠崎恒夫
小樽商大の会計教員 …… 渡邊和夫
小樽高商、小樽経専時代の法律学の教師たち …… 神田孝夫
社会情報学科史 …… 沼田　久
中村隆志
「求める」国際性を貫いて —— 英語に並び立つ「第二外国語」教育の歴史 —— …… 高橋　純
浜林生之助たちの採用人事をめぐって …… 東　博通
小樽高商の海外修学旅行記録 …… 阿部安成
渡邊龍聖、大西猪之介、大熊信行、加茂儀一、小林多喜二 …… 倉田　稔
小樽高商とスキー …… 中川喜直
小樽高商・商大と剣道 …… 髙橋靜次
小樽高商・商大とテニス …… 鈴木将史
野球部１００年概史 …… 沼田　久
大正期の小樽高商における文学色 — 小林象三、高浜年尾、伊藤整を中心として …… 菊地利奈

［統計資料］

Ⅰ　沿革図
Ⅱ　組織機構図
Ⅲ　歴代主要人事
Ⅳ　主要統計表
Ⅴ　教職員数
Ⅵ　生徒・学生
Ⅶ　留学生
Ⅷ　図書館
Ⅸ　教員研究
Ⅹ　公開講座
Ⅺ　歳入・歳出
Ⅻ　情報処理センター
XIII　保健管理センター
XIV　ビジネス創造センター（ＣＢＣ）
XV　札幌サテライト
XVI　緑丘会関係（支部・会員数）
XVII　土地・建物調
XVIII　職員名簿

凡例

一　原則として常用漢字を用いる。

二　史料中の歴史的かな遣いやカタカナ表記は、原文のまま引用する。読みやすさを考慮して、適宜、句読点を付した。

三　年次の表記は、引用史料中のものを除き、西暦に統一する。各小見出し中、その初出の箇所に、一九一一（明治四四）年のように、（　）内に元号を記した。

四　『緑丘』というタイトルでは一つの新聞と二つの雑誌が存在する。新聞『緑丘』は、その名称を『緑丘』、『小樽高商緑丘新聞』、『緑丘新聞』、『北方経済月報』、『小樽商大緑丘新聞』などとしばしば変更するが、本通史ではすべて『緑丘』で統一し、号数・刊行年月日を記した。雑誌はいずれも同窓会誌で、一つはかつて関西支部によって発行されていたもの、もう一つは緑丘会本部によって現在刊行中のものである。前者は蟇目英三氏の献身的編集によるもので、一九六三年から七三年まで全八八号が刊行された。本通史では、前者を〔蟇目版〕と表記した。

五　本通史の執筆は、荻野富士夫が担当した。